
Mistletoe

nico

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i s t l e t o e

【Nコード】

N 7 0 9 5 F

【作者名】

n i c o

【あらすじ】

17世紀、クリスマススイブに生まれた貴族の娘ノエルは、親に政略結婚させられてしまった姉の元恋人、エドワードが好きだった。彼を想い、彼を追いかけて、宮廷に上ることになる。自由な恋愛が許されない時代、自由な恋愛を望み、本当の愛を知った、ある少女の愛の物語です。

1 / 6 (前書き)

こちらはべた恋“クリスマスチャリティー企画”参加作品です。クリックに御協力いただけますと嬉しく思います。よろしくおねがいします。

今回は連載にしてみました。全5回の予定です。宜しければ最後までおつきあいくださいまし。^^
でわでわ、お楽しみいただけますと幸いです。目を通していただき、ありがとうございます！

窓の外に広がる空は濺^{よど}んでいた。どろどろと渦巻く分厚い雲は太陽を包み隠し、視界に影を落としている。まだ昼すぎにも関わらず、辺りはすでに仄暗く陰鬱^{いんうつ}だった。昼と夜の狭間に迷い込んでしまったみたいだ。二度と出られない錯角を覚える。このまま逢魔^{おっま}が時の世界が続いてしまうのではないかと恐怖に感じる。

私をもっと小さな子どもであれば、馬に乗って太陽を探しに出かけただろう。西の果てまで駆けて先回りして太陽を待ち構えただろう。

「雨が降るのかしら」

隣で頼杖をつく姉が中空を見上げて言った。私は空気を吸い込み、ゆっくりと吐き出してみた。

「雨の匂いがするわ。降るかもしれない」

「そう」

呟きに似た声だった。姉は物憂げに庭を眺めている。私は姉の視線を目で追ってみた。彼女が見ているのは大きな木。私たち姉妹の思い出の木。

庭には大きなリングの木がある。それは私たちが小さな頃からすでに大木だった。庭師によると樹齢100年は軽く超えているらしい。そしてその枝の間に宿り、茂っているのはヤドリギ。たとえ母体の木が枯れたとしても、枯れる事なく、青々とその葉の色を保つと言われているヤドリギ。……私の誕生花。

まだほんの小さな子どものころ、あの周りで毎日姉とかけっこをした。ポニーに乗って枝を剣に見立て、十字軍になりきって遊んだ。私は勇ましい騎士だった姉を思い出し、彼女の横顔に視線を移した。が、その勇敢な面影はなかった。彼女は消えてしまいそうなほど弱々しく、折れてしまいそうなほど儂^{おつ}げだった。

「元気がないわ、どうしたの？」

実は元気がないのは今に始まったことではなかった。しかし、あえて私は聞いてみた。この所、姉は随分と沈んでいる。塞ぎ込んでしまっている。本来は快活な人なのに、笑顔を見せなくなって長い。姉を腫物扱いするようになって長い。

「ノエル」

私の名を呼んだ。黙って姉を見つめた。姉の緑色の瞳は揺れている。私の好きな緑色がにじんできている。

「ノエル……」再び私を呼ぶ。雫が形を作った。紛れもなく涙だ。

「どうしたのアンナ」

姉の涙を見るのは初めての事。何がおきてもいつも気丈に背筋を伸ばしていた人だ。だから私は不安になった。「何があったの？」

「私は結婚するの」姉はうつむいた。まつげを伝い、ポタポタと水滴が落ちた。「結婚するの」

きつと恋人だ。姉の素敵な恋人と結婚するのだ。ようやく二人は結ばれる。私は手を叩いた。自分の事のように嬉しくなった。

「おめでとう！ 相手はエドワードね。素敵だわ。とうとう父上に認めてもらえたのね。それとも父上の反対を押し切るの？ でも、どちらにしても二人ともとっても素敵な夫婦なるわ。 うん、素敵！」

エドワードと姉は父から激しい反対を受けていた。理由は身分の差にほかならない。姉は何度も父に叩かれたりした。影でそれを見て、私が心を痛める事はもうない。父を憎むことはもうない。二人は誰にもはばかりことなく、幸せな家庭を持つのだ。

「ちがう、ちがうのノエル」

姉は顔を歪めながら首を振る。「他の人なの」

叩いた手の行き場がなくなった。姉の表情は罪人のように曇っている。胸が痛んだ。

「エドワードじゃないの？ ……誰なの？」

「ウェストン卿」

「ウエストン卿？　なぜあんな人と」

「父上が決めたのよ」

姉は両手で顔を覆った。指の間からは次第に涙の雫がこぼれた。
「エドワードを諦めると言うの。別れると言うの。何の得にもならないという理由で。女には結婚の自由はないと言うの。結婚は家の一大事業だから、主である父上が決めると言うの」

私はウエストン卿を思い浮かべた。一度うちの城に來た事がある。姉よりも20も年上の伯爵だ。あまり良い噂は聞かない。そればかりか好色だと聞く。こんな田舎の城にも悪い噂が届くほどの、ろくでもない伯爵だ。対しエドワードは姉より二つ上の18歳。黒髪が素敵な騎士だ。^{ナイト}私は体が震えた。姉がウエストン卿に、あの太った醜い男に嫁ぐなんて。エドワードを諦めるだなんて。

「断れないの？」

「無理なの」姉は声を出して泣き始めた。「無理なのよ」

姉のすすり泣く声を聞いていて、私はなぜ二人は駆落ちしないのだろうと思った。家などどうでもいいと思えるくらい、二人はとても素敵だった。私は窓辺からよく馬で遠乗りに出かける二人を見ていた。濠のほとりの牧草地に並んで座る二人を見ていた。聞こえてくる笑い声に、私の顔まで綻んだ。寄り添う二人は幸せそうだった。
「ねえ、アンナ。……逃げないの？　二人で逃げないの？」

意を決して聞いた。

「無理よ、逃げられるわけがない」

私は震える姉の手に自らの手を重ねた。姉の震えを止めたかった。
「アンナ、逃げられる。やればできるわ。ありったけの宝石を持って逃げるの。私、手伝うわ。バスケットに食事を用意する。父上に負けてはだめ。彼の手が届かない所へ、遠くへ逃げるの。そして名も知らない街に小さな土地を買うの。牛を飼い、鶏や羊を飼い、畑を作るの。それからチーズを作るのよ。全てを捨てて二人は幸せになるの。そうよ、エドワードにも相談し――」

「そんなみすばらしい生活は嫌よ！」

荒げた声に、私の言葉は遮られた。姉の大きな声を聞いたのは初めてだ。

「ノエル、あなたは現実が見えていない。あなたは子どもすぎるわ。私は貴族。駆落ちなど出来ない。一般人になどなれない」

私はうつむきしかなかった。貴族がなんだというのだ。もし私なら、私ならエドワードと逃げる。逃げて二人で暮らす。そして二人で笑いたい。心から思う。

「エドワードを諦めるの？ ウェストン卿と結婚するの？」

姉は悲嘆にくれながらも笑ってみせた。

「仕方がないわ」

私の頭からエドワードが離れなかった。息を飲むほどに冴えた青い瞳が離れなかった。瞳の色に合わせた青いジューストコールが離れなかった。彼のはにかんだ笑顔が離れなかった。

「アンナ……後悔しないの？」

「しないわ」

「エドワードを愛してないの？」

「愛しているわ」

そう答えた姉の姿は、悲愴美に溢れていた。例えるなら凜と咲き誇る一輪の百合だ。手折る事などできない孤高の百合だ。

以降、私は話しかけることができなかった。

女の幸せは家柄の良い男性との結婚だと母は言う。女は家のために黙って従うのが当然だと父は言う。

私はそう言い聞かされて育ってきた。良い結婚のために言われたとおり知識と教養を身につけ、礼儀作法を小さな頃から叩き込ま

れてきた。それが、当然なのだと思っていた。

どちらかといえば姉は私と違っていた。両親の言いなりというよりも、自分でやりたいようにやってきた人。それが痛快で魅力的で美しかった。おまけにエドワードはとても素敵な男性だ。最初、両親の反対を押し切り自由に恋愛する姉が不思議でならなかったが、エドワードを見て、愛があればそれでいいと思うようになっていた。そうでありたいと思うようになっていた。

しかし、今、その姉は。あきらかに両親の言いなりだ。あきらかに私みたいだ。

「アンナ、決心したのね。もうエドワードなどには会わないと」

母は姉の金色の髪を丁寧にとかしている。母の色をそのまま受け継いだ姉の髪。プラチナブロンド。スツールに腰掛けた姉は、黙って頷いていた。「もう会いません」

「宜しい」母は満足げに微笑んだ。「貴族に愛は必要ないの。邪魔になるだけ。わたくしたち女には地位がないのを知っているわね？でも、結婚によって女は社会的地位が公認されるの。嬉々として受け入れなさい。結婚で得るものは大きい。家はよりすばらしい人脈と富を得るし、あなたは自由と地位を得る。一石二鳥ね。あなたはこれから宮廷人になるの。これからはさらに艶やかに着飾り、宮廷の花になるの。人々から羨望の眼差しを受けるのよ。わたくしに良く似たあなたなら必ずそうなる」

姉の髪はシルクを思わせるほど艶やかになった。母はそれをサラサラと持ち上げた。

「あなたにはウェストン卿のもと、華やかな未来が待っているのよ」聞いていた私は反吐が出そうになった。華やかな未来？ちがう、待っているのは暗黒の未来だ。エドワードのいない未来なんて地獄だ。そうに決まっている。

手を固く結び、私は何も知らない子どもの仮面をかぶった。あどけない自分を演じた。

「母上もそうだったのですか？」

少しいじわるな質問かもしれない。

「あら、いたのねノエル。ええ、そう。もちろんそうよ。そしてあなたもそうなるの。貴族の娘の幸せは結婚から始まるのよ。前から言っているでしょう」

冷たい声の返事が返る。母は昔からそうだった。私に興味を全く持たない。父もそうだが二人は私を空気のように扱う。お腹をすかせていても、与えられたのは着飾るためのレースのドレス。彼らは子どもが何を欲しいのか理解しようとしないう。彼らの暖かな手を感じたことはない。二人が関心を寄せるのは、家名にふさわしい娘の姿だけ。娘の将来の結婚だけ。

同じ思いをしているであろう姉を見つめた。が、私の方を見ようとしてもしない。心でアンナと呼び続けても、彼女が振り返ることはない。

姉が身に纏う柔らかな色調のローブ・ド・シャンブルは、かえって彼女の孤独と悲愴を引き立てていた。いつも彼女の側にあった、エドワードの暖かな手はもう届かないのだろうか。

寒い。身震いがした。

「私はそうはならない」誰にも聞こえぬように呟いた。「絶対、嫌」

姉が醜い男に嫁いで2年が過ぎた。便りもなければ、この城にも彼らは来ない。姉の姿は2年間目にしていない。仕方がない、宮廷は遙か遠くだ。

私はクリスマスイブに16歳になった。そろそろ結婚の話が来ってしまう歳だ。結婚していてもおかしくはない歳。毎日、不安に思っていた。

エドワードの姿も2年間見ていない。彼は今、何をしているのだろうか。宮廷に上がったという話を耳にしているけれど、それ以外の噂は全く聞こえてこない。

私はエドワードの事ばかりこの2年間考えていた。これは、恋かもしれないと思う。彼を思うと心臓が早くなった。顔が熱くなった。彼と結婚できたら良いのと思った。姉が人妻となった今、私にもチャンスがあるかもしれない。腹黒い事だと思うけど、そう考えるのを押さえられない。

宮廷は遠すぎて眩しい存在。きらびやかな夢。そこにエドワードと姉がいる。私の愛してやまない二人がいる。

「父上、母上」

くつろいでいる両親の側に歩み、恐る恐る声をかけた。両親が揃っているのは珍しい。特に父は、普段はほとんど宮廷にいて城にはいない。

「なあに、ノエル」

珍しく母は猫なで声を出した。父はといえば、私のほうを向こうともしない。興味が無いのだ。

「宮廷に行きたいと思っています」エドワードと会いたいがために。「私もそろそろ宮廷に上がる頃だと思っています」姉と会いたいがために。

「まあ。あなたは宮廷には興味が無いと思っていたわ」

母は目を輝かせた。そして父から受け継いだ私の茶色の髪に触れる。滅多に進んで触れた事はないのに、丁寧に触れる。

「金色の髪のアナほどではないけれど、ノエルも十分花になり得るわね」

ワインを飲む父を見、母は唇の端をくいと上げた。「見て、この瞳。美しいエメラルドグリーン。絶世の美女とうたわれたわたくしの母上の瞳と同じ色。教養も申し分ないし、あなたから頼んでもらえないかしら？王妃殿下の侍女としてどうかしら。もしかして高貴な人の目に止まるかもしれないし、より良い縁組みがあるかもし

れない。何といつても、この子にはわたくしに似て華やかなオーラがある。アンナにはない強さがある」

父は今日始めて私を見た。商品を品定めする目つきだ。母もそう。私を商品としか見ていない。いつだってそんな目だ。

「そうだな。明日、宮殿に使いを出そう」

感情のこもらない声。

私は口を結んだ。伝え聞く物語では家族愛をうたっているのに、この家の有様はなんなのだろう。私は人ではなく石像から生まれてしまったのだろうか。だとしたら納得がいく。この有様を理解出来る。始めから愛など存在しないのだ。

私は頭を振って両親を思考から追い出した。努めて宮廷の事を考えようとした。エドワードと姉の事を考えようとした。容易く彼らは鮮やかに蘇った。

宮廷に行きたいと強く思った。宮廷に行けますようにと強く願った。エドワードに会う事ばかりを考え、笑顔の姉に会いたいと思った。彼は私を抱きしめてくれるだろうか。姉は私を抱きしめてくれるだろうか。

早くこのアンナのいない、愛のない城から飛び出したかった。

窓から見える月は満月で、私は月に祈り続けた。

その日の空は晴れ渡っていて、心地よいそよ風は私の髪をなぶっていた。父と私はそれぞれ馬に乗って、宮廷を目指している。私は父の力で宮廷に上がることになり、本日から王妃付きの侍女となることが決まった。不安などなく、あるのは輝きを放つ希望、ただそれだけだ。

私たちの前後には8人の従者がいて、彼らが掲げるのは我がブリューネル家の旗。緑色の生地^{トリコルヌ}に金糸で紋章が描かれ、私は誇らしげにそれを見上げた。

本街道に入るとさらに胸が高鳴り、喜びはいたるところから噴き出してきた。轍^{わだち}がつき、あちこちに出来たくぼみやぬかるみに馬は難儀したが、それすらも楽しく思えた。牧草地で草を食む牛を背景にして、道のほとりに咲き誇る白い花は、太陽に照らされて神々しく見えた。今日という日を境にしてモノクロームの私の世界は一転して色鮮やかに豊かになった。

「伯爵、御無沙汰しております」

突然の声に、私は花から前方へと目を向けた。

向かいからやってきた若い男が肉付きの良い黒い馬に乗り、父に三角帽^{トリコルヌ}を取り挨拶をしている。父はにこやかそれに答えた。瞬時、父からは優しさが溢れ、彼の凍てついた心は形をひそめた。

「ペレアス卿、立派な青年になった。いくつになられた？」

父の質問を受けながらも、エドワードと同じ黒髪の青年は私の顔を見つめている。私は父や母の言い付け通り、顔に微笑みを浮かべた。

「22です。ところでこちらの貴婦人^{レディ}は……」

「私の娘だ。アンナの妹、ノエル。本日付けで宮廷に上がり王妃殿下の侍女となる」

父は私をべつし、ペレアス卿の前へと促した。ペレアス卿の視線が鋭くて目を伏せたくなつたが、父のいる手前我慢した。

「ノエル・ブリューネルです」

「私はジャン・ペレアス。なるほど、姉上と良く似ていらつしやいますね」

ペレアス卿は優雅に笑み、自らの胸に手を当てた。その仕草どれひとつとっても、良い家柄の人なのだろうと推測できた。

「できれば昼食を御一緒にしたいのですが――」

ペレアス卿は私から父へと視線を移した。「残念ながら急用があります。急ぎますのでこれにて失礼いたします。後日、改めて……」そして再び私を見る。「レディ、宮廷はすぐそこです。あなたという花が咲くと、一層宮廷は華やぎます。殿方はあなたを見て黙ってはいないでしょう。宮廷で再び会える事を楽しみにしています」

礼をすると、二人の従者を連れたペレアス卿はトリコルヌを正しかけ声と共に馬を走らせた。彼の白いケープははためき、青空に映えていた。

「お世辞が上手い方だわ」

何気ない私の呟きに父が反応し眉をつり上げた。もう優しさや笑みはどこにもない。あるのは底知れぬ企みだ。

「彼を覚えておけ。彼はまだ独身で侯爵家の跡取りだ。万が一落とせたのなら、わが家にもお前にも華々しい未来が待っている。精一杯知恵をしばり、彼を喜ばせることだ」

私は父に従うふりをして深く頷いた。

「……でも父上、落とす必要はないのでは？ 結婚は家同士の話し合いによるものと思っていました。姉上のように。私はそれに従えば良いと思っていました」

父は横目で私を睨んだ。

「愚かな娘よ。正攻法では無理だ。彼は名門の出だ。我が家は相手にならん」

「わかりました。善処します。家のために、私のために」
答えながらエドワードを思った。エドワードが手を広げて私を待
っていてくれる気がした。

王妃は美しい女性だ。白い薔薇を思わせる人。私を含め居所には
15人の侍女が仕えていて、陽当たりの良い部屋は王妃の白肌を、
そして艶やかさを引き立てていた。さしずめ私たち侍女は王妃をよ
り目立たせるための霞草といったところだろうか。

宮廷に上がってまたたく間に1週間が過ぎた。が、未だにエドワ
ードに会うことは叶わなかった。そればかりか彼は十字軍を志願し、
異教徒と戦っているとの情報を得た。私はひどく落ち込み悲しんで
いた。何が彼を戦いに駆り立てるのだろうか。

私は進んで毎朝王妃に従って礼拝堂に行った。そして熱心に彼の
無事を祈り続けた。それが終わると王妃の居所で大判のタペストリ
ーに刺繍を施した。私が担当するのは広大な空の部分だ。毎回青い
糸しか使わなく、うんざりしていた。隣の侍女、アンリエットが担
当する花の部分がうらやましい。少なくとも、花は空よりも変化に
富んでいる。

「ねえノエル」

小声でアンリエットが話し掛ける。私は空にとりかかったまま、
彼女を見ずに返事をした。

「なあに」

「見て、ペレアス卿がこちらを見ているわ」

「ペレアス卿？」

私はアンリエットとともに扉の横に佇むペレアス卿を見た。王の
覚えがめでたい、家柄の良い廷臣。エドワードと同じ黒い髪にビー

玉のような灰色の瞳。私たちに気付いたのか、彼はウィンクをした。アンリエットはこたえていたが、特に興味がない私は再び空と向き合った。まだまだ先の道のりは長く険しく、考えると気分が落ちる。青空なんか糞食らえた。雲がほしい。変化が欲しい。

「ねえ、彼は私とあなた、どちらを見ているのだと思う？」

アンリエットは可愛らしく頬を染めた。

「あなたよ。それにあなたは金髪だわ。皆、金髪が好きなのよ。嫌いな人はいない」

姉、アンナを思い浮かべた。まだ姉には会えていない。彼女は今、どうしているのだろうか。それからエドワードを思い浮かべた。彼は金の髪の姉を心から愛していた。——今も彼は姉を愛しているだろう。

「それって変だわ。髪が理由になる？」

わざわざアンリエットは私を覗き込んだ。エドワードと同じブルーの瞳。

「わからないけど、言える事は私じゃなくてあなたを見ているということよ、麗しいアンリエット。さあ、ペレアス卿が見てるわよ」

「ノエルったら……」

アンリエットは腰を持ち上げて座りなおし、ドレスのドレープが美しく見えるように整えた。

それを後目に、私は必死に針を動かした。

「ペレアス卿は素敵だわ。彼は侯爵家の跡取りよ。申し分ないわね」
彼女はペレアス卿に釘付けた。

「そうね」私はにべもなく言った。「申し分ないわね」

「伯父様に頼んでみようかしら」

アンリエットはうつとりとした目で言った。彼女の伯父は王家の血を引く公爵だ。権力がある。

私は針を止め、彼女に目配せをした。「そうすればいいわ。いい縁組みだと思うわ」

数日後、驚くべきことに宮廷内に姉専用の部屋があることを知った。ただの部屋ではなく王妃のように豪華な部屋だ。それは彼女が国王の愛人であることを無言のうちに示している。私は信じられなくて体を震わせた。夫は？ エドワードは？ と、扉を叩く手がガタガタと震えた。

「アンナ」

私は彼女に会いにいった。彼女は呼び掛けに答えず、代わりに私を抱きしめてくれた。

「ノエル、大きくなったのね」

息を飲んだ。飲むしかなかった。姉に以前の気丈さはなく、疲れで寂しそうだった。緑の瞳は感情がなく、赤の他人に見えてしまった。まるで母のような目、母のような表情だ。

「……幸せなの？」

無意識に口が動いてしまった。はっと気づいた時には遅かった。

姉は薄く笑みを浮かべた。

「ええ、幸せよ」

嘘だ、と思った。エドワードといた時のそれとは違う。彼女は豪華な部屋の主だとしても、幸せではないのだ。国王に望まれて、廷臣は断わる事はできない。きつと姉も望まずともそうしているのだらう。

「痩せたわ」

「気のせいよ」

「ウェストン卿は？」

「さあ、知らない。きつと恋人と仲良くしているわ。何人も恋人がいるのよ。……それに、彼の事は興味はないわ。最初から顔も見たくなかったの。黙っていたけど、彼の跡取りを春に生んだのよ。そ

れで二人はおしまい。もうあの人には会いたくないわ」

絶望が襲ってきた。目がくらくらする。貴族とはこういうものの
のだろうか、自分の生まれを否定したくなる。

「跡取りって……まさかアンナ、子どもを生んだの？」

「ええ。名前はフランシスっていうの。男よ」

おめでとうというべきか、私は迷っていた。迷っている事を隠し
たくて、親指の爪を噛んだ。言葉を探した。

「アンナの子ども……。きつと可愛いんでしょうね。会ってみたい
わ。私は叔母さんになったのね」

エドワードとの子どものほうが、もつと可愛いだろうけど。そう
付け足したかったが、止めておいた。

「子どもがどんな子なのか知らないわ。私は生んだだけ。この腕に
は抱いていない。名前だつて決められなかった。生んですぐに取り
上げられてしまったの。未だ子どもに会えていない。どこにいるか
さえ分からない。彼の話では、田舎の城にいるそうよ。独自の教育
を施すんですって。時々本当に自分は子どもを生んだのかと、疑問
を感じることもあるの。夢だったんじゃないかと思ったりするの」

私は絶句した。言葉がどうしても見つからない。出てこない。

姉はそんな私を察したのか、目を逸らせて窓を見つめた。

「彼は運が良いわ」姉が続ける。「彼は私が国王の愛人になったこ
とで、著しく出世したのよ。感謝してもしきれないんじゃないかし
ら。あんな奴が出世するなんて、どうかしてると思うけど。それに
私は跡取りを生んだ。彼の家が途絶える事はないのよ。忌々しいあ
の家は、しばらく途絶える事はないの」

これ以上、人が変わってしまったような姉の言葉を聞きたくはな
かった。結婚して2年の間で、彼女に何が起きたのだろう。どうな
ってしまったのだろう。姉を思うと、涙がこぼれそうになった。

「でも、今は幸せなんでしょう？」

幸せとは分かっていなくても、もう一度聞いた。少しでも姉は幸
せなのだと思いたいせいかもしれない。

「そうね、当然幸せだわ」

姉は国王から賜った指輪を見せながら言った。はめ込まれた宝石は光を受けて輝いていた。しかしそれは、私にはいばらの指輪に見えてしまう。彼女を捕えて離さない呪いの指輪に見えてしまう。

「エドワードとは会った？」

何気なく出てしまった言葉。ひどい言葉だと分かっているけど、彼女に聞きたかった言葉。「彼は十字軍にしていると聞いたけれど、彼に会った？」

急に姉の顔が陰しくなる。私を恐ろしい形相で睨む。「二度と彼の名を言わないで！」

背筋が冷たくなるとともに悟った。姉は愛する人を抹消してしまった。気持ちを殺してしまった。

私は神に祈った。

——どうか彼を、エドワードをここに連れてきて下さい！ アンナを救って下さい！

きっと、姉の笑顔を取り戻せるのはエドワードだけだ。変わってしまった姉を元通りにできるのはエドワードだけだ。

同時に私は不謹慎にも彼に会いたくなかった。彼に抱きしめられたと思った。もう姉のものではなくってしまった彼に。私のものになるかもしれない彼に。

「『キッシング・ボウ』って知ってる？」

宮殿の庭園を散歩していた私は、いきなり背後から声をかけられた。かけたのは意外にもペレアス卿。エドワードと同じ黒髪の彼だ。にしても、突然聞く言葉が『キッシング・ボウ』うんぬんとは、よほど変わり者に違いない。

「知ってるわ。クリスマスの時、ヤドリギの下にいる女性は男性からのキスを拒めないというアレでしょ。で、キスするたびに一つずつ実を落としていくのよ。……それが何か？」

触れそうなほどギリギリにまで寄って来た彼は、私の髪の毛にまとわりついた葉っぱを取ってくれた。

「君の誕生花はヤドリギなんだってね。12月24日。それに“ノエル”という名前……わかりやすいね、クリスマスだ」

「そうだけど……誰に聞いたの？ 私の誕生日」

ペレアス卿は私の手をそっと持ち、手の甲にキスをした。私は黙ってそれを受けた。

「ノエル・ブリューネル、君の美しい姉上が教えてくれた」まだ私の手を離そうとしない。「姉上は君を大切にしているね。君の事を話す時は生き生きしている。普段はその……」私の耳元で囁く。「夢だけだ」

ペレアス卿は木陰に自らのボビン・レースの黒いケープを広げると、私に座るように促した。私が黙って従うと彼も私の隣に座った。「ねえノエル」

「何ですか、ペレアス卿」

ペレアス卿は肩を震わせて笑った。

「レディ、それはあまりにも他人行儀だ。僕はジャン。ジャン・ペレアス。ジャンと呼んでくれないか。ほら、言ってみて」

いぶか訝しく思いながら、私は渋々言った。「ジャン」

「宜しい」ジャンは満足げだ。

それから彼は何を思ったのか、私の手に手を重ねてきた。私は引こうと思ったが、ぐっと押さえられてしまい、引こうにも引けなかった。

「ところで」ジャンは私を真直ぐ見据えた。「君は結婚についてどう思う？」

「別に……何とも思わない」

無表情に答えた。「夢も希望も何もないものだわ。強いて言えば、

地獄かしら」

「地獄？ うまいことを言う」

ジャンは鼻を鳴らした。そして私の顎に触れ、指で持ち上げた。

「君はアンリエットを焚き付けたね？」

何の事が分からず、私はジャンをまじまじと見た。

「とぼけるなよ。アンリエットの家から結婚の話があった。彼女の伯父の圧力つきだ」

「ああ」

私は王妃の部屋でのことを思い出し、頷いた。「良縁じゃないの。アンリエットと貴方は」

ジャンは私の顎から手を離れた。

「断わった」

「なぜ？」

「僕は愛する人として結婚する気はない」私を見る。「アンリエットを愛していない」

「愛だなんて」

私は母の、父の、そして姉の言葉を思い出して笑った。貴族である彼が、私の家よりはるかに名門貴族であるジャンが愛を口にして

いる。

「めずらしいわね、あなた」

「ジャンだ」

「めずらしいわね、ジャン」言い直した。

彼は木の根元に咲く花を手折り、私の髪に差し込んだ。何を突然と思い、私は小さく飛び跳ねた。

「君に仕返ししようと思う」

ジャンは意地悪く私を見、微笑んだ。まるで小さな男の子みたいだ。「今年のクリスマスには必ず君にキスをすることにする」

「え？」

私は目を丸くするしかない。突然何を言っているのだろう。

「『キッシング・ボウ』だ。クリスマスにヤドリギの下、女性は男

性のキスを断わる事が出来ない」

言うと彼は私の手を引いて、立たせてくれた。羽が生えたように、軽やかに立つことができた。

「逃げるわ。絶対ヤドリギの下には立たない」

「無理だね、僕はヤドリギを持ち歩くから」

馬鹿げた答えに噴き出してしまう。

「持ち歩くって……あなた馬鹿ね。ルール違反よ」

彼も笑った。「そう、僕は馬鹿だ」

目の前の彼を見上げた。

長い睫、灰色の瞳、薄い唇、そして漆黒の黒髪……。

黒髪のジャンがエドワードに見えた。私は彼がエドワードであれば良いのと思った。エドワードにキスしてもらえるなら、死んでもいい。それだけで生きてきて良かったとさえ思える。思い残す事は何もなくなる。

そんな私を、ジャンはただ真直ぐに見下ろしていた。

宮廷に上がってから気づいた事がある。それは月日が経つのが異様に早いという事。仕事や行事に忙殺されているからかもしれないが、とにかくあつという間に時間は過ぎる。

葉は色付き、空気は以前よりも冷ややかになっていた。時折肌寒く感じ、ベルベットのケープを用意した。秋は深まりを見せ、世界はすでに冬支度をしている。寒がりの私は冬が嫌いだ。気分は自然に落ちてきてしまう。

季節が移り変わっても、変わらずエドワードを思った。一日の大半は彼の事を考えて費やし、残りのスペースで姉の事を思った。そして時々、キッシング・ボウだと笑ったジャンを思い出す。

記憶の中のエドワードは馬の扱いがとかく上手く素晴らしかった。私には国王よりも優雅に乗りこなすように見えたと、頭の先からつま先までどこもかしこも素敵に見えた。服装にしてもそうだ。宮廷内の華やかに着飾る廷臣に比べると、エドワードのそれはどこから見ても地味で質素で見劣りするものだったけれど、それでも私は誰よりも彼はおしゃれだと今でも思っている。

もう2年以上彼に会っていないと思うと、寂しさが込み上げてくる。この先彼の記憶が薄れるかもしれないと思うと、悲しくて涙が出そうになる。

私はエドワードに会いたくてたまらなかった。しかし、同時にためらってしまう自分もいる。彼は私を一人の女として見てくれるだろうか。アンナの妹としてではなく、ただ一人の女として見てくれるだろうか。

「最近、国王陛下が私を見る目が違うの。……その、なんていうか、熱を帯びていると思うの。どう、感じない？」

王妃の居所。考え事をしている私に、唐突にアンリエットが耳打

ちをした。私はあわてて王妃を見ると、彼女はたおやかに窓辺の椅子に腰掛けていた。

「ちよつと、王妃殿下に聞こえてしまうわ。非常識よ」

私は不快に思った。アンリエットの口を縫ってしまいたいと思えた。貴族に愛がないとはいえども、正妃の前で言つて良い言葉ではない。

「大丈夫よ。……あのね、王妃殿下には恋人がいらつしやるの。それは……その……私の伯父なのよ」

「ええっ!？」

驚き、大声を出すと、侍女も王妃も一斉に私に目を向けた。たまらなく恥ずかしく、私は熱い頬を感じながらスカートを広げて会釈し、そろそろと皆に背を向けた。遠くのほうにジャンが見える。彼は私の失敗を見たのか、笑っている。

「大声を出さないでよ」

アンリエットはペチコートごしに私の太ももをつねった。しかし、痛さを感じないくらいに私は動揺していた。なぜなら――

「国王陛下が知ってしまったわれたら、王妃殿下もあなたの伯父も断頭台行きだわ……」

戦慄し、私は声をひそめた。黒い頭巾を被った処刑人がまざまざと頭に浮かび上がる。美しい王妃の首が体から離れてしまう様を想像する。そして否定する。考えたくもない恐ろしい絵図だ。

「だから内緒なのよ。陛下は黙認していらつしやるという噂もあるけど」アンリエットは私の腕をつかみ、引き寄せ、呟いた。「でね、明日の晩餐会での陛下を見ていてくれる? ……確信に近いのよ」

「わかつたわ」

王妃を思った。彼女はこの愛人候補の少女をどう思うのだろう。新しい愛人になったならどう思うのだろう。何も思わないのだろうか。どうでもいい事なのだろうか。

姉を思った。彼女の鍾おもいは愛人が増えることによって、いくらか軽くなるのだろうか。姉は少しは自由を得ることが出来るのだろうか。

最後にアンリエットを思った。彼女は数多くの愛人の一人となることに、微塵も抵抗はないのだろうか。断れないとはいえ、本当に抵抗はないのだろうか。彼女は嬉々としているけれど、それは喜ばしいことなのか、私には分からない。自分なら嫌だと思う。絶対、嫌だ。自分ならそうなる前に病氣とでも言っ宮廷を去るだろう。私は手元の刺繍の続きをしようと考えたが、思う事があり再びアンリエットに向き直った。

「でもアンリエット……。ジャンは、ペレアス卿はどうするの？ 気持ちを諦めるの？」

エドワードを思った。今の私に気持ちを諦めることなどできない。彼を思う気持ちを押さえられない。たとえ彼がアンナを好きなままだとしても。

そんな私に、アンリエットは冷たい視線をよこした。

「気持ちって何の？ 私には陛下のほうが魅力的よ。どれほどの地位が望めると思っているの？ それに……」

「それに、何？」

「彼は好きな人がいるから、愛している人がいるから私と結婚することはできないって言ったのよ。馬鹿げた人だわ。私と結婚すればより多くの富と人脈を得るのに。それなのに……愛だなんて笑っちゃう。愛なんてもののために、すべてを犠牲にするつもりなのかしら」

アンリエットは目を伏せる。長い睫の影が落ちた。

「愛なんて、この宮廷では邪魔にしかない。そんなもの、身を滅ぼすことになりかねない。愛を知る人間は弱い^{きま}いのよ。自分よりも大切な者が出来てしまう人間は弱い^{きま}いの。欺瞞に溢れた宮廷では致命傷になってしまう。どうやって身を守るといふの。愛なんていらない。貴族なら熟知しているはずなのに。なのにどうしてなのかしら。

……彼は、愚かな人ね」

私はアンリエットの言葉を静かに聞いていた。そして、ジャンを見た。「そうね、愚かだわ」

母が私の部屋に訪ねてきたのはその日の夜のことだった。従者を連れ、しなやかに佇んではいるが相変わらず厳しい目をしている。彼女がまさか訪ねて来るとは思わなかった私は、慌ててしまい、結ばうとしたスカーフを落としてしまった。が、母は氣にとめた様子もなく表情を変えなかった。

「あなたの父上から贈り物があるのよ」と、抑揚のない声。

「父上から？」

耳を疑った。珍しい事もあるものだと思直に驚いた。母の後ろに立つ従者が持つのは大きな箱。私に興味も関心もない父が贈り物を、そしてそれを冷徹な母がその手で届けるとは、信じられない出来事だ。違和感に寒気がした。

「これはドレスよ。明日の晩餐会で着なさい。あなたはどの娘よりも華やかでなければならぬ。なぜなら――」

母は途中で言葉を切る。そして私に背を向けた。

「明日、また来るわ。今日は体に薔薇のオイルを忘れずに塗ること。

……良いわね」

私はわけも分からず「はい」とだけ答えた。父や母の真意はわからない。何を企んでいるのかわからない。

翌日、王妃の居所にいる侍女は皆がそわそわしていた。さすがに国王主催の晩餐会当日となると、浮き足だってしまうのだろうか。特別興味のない私は他人事のようにそれを見ていた。

エドワードがいれば、私だって彼女たちのように張り切っただろう。しかし、彼はいない。ずっといない。彼はいつ戻るのだろうか。一体いつになれば会えるのだろうか。

その日、真面目に業務をこなしたのはきつと私だけだろう。タペストリーを上手く刺繍出来たのは私だけ。聖書を心を込めて読めたのは私だけ。真面目に詩を作ったのは私だけ。お腹の底から歌を歌ったのは私だけ。そう、自負している。彼女たちは皆、晩餐会のことしか考えていない。今日のドレスのこと、殿方のことしか考えていない。話しかけてもうわの空だ。

私は彼女たちをうらやましく思った。私もそわそわしてみたいと思った。何かに夢中になりたかった。そうしないと心が壊れそうだと感じた。私の中は、きつと空っぽなのだ。

午後、王妃の元から下がった私は、回廊を歩き、割り当てられた居室へと向かった。晩餐会の身支度をしなければならぬ。廷臣は出席を断わる事など出来ない。

母は昨晩の予告通りに部屋に現れた。すでに彼女は着飾り、背後には侍女を従えていた。

「薔薇のオイルを塗った？」

母の問いに私は首を振った。

「昨日は疲れていたから……塗りませんでした」

その答えが母をひどく不機嫌にさせた。「愚かな娘ね。言ったでしょう？ あなたはどの娘よりも華やかでなければならぬと。あれほと言い聞かせたのに、愚鈍な子だわ」

母が侍女に目で合図すると、侍女は手際よく私のドレスを脱がせて薔薇のオイルを塗り始めた。外気の寒さに鳥肌が立ったが、私は黙って従った。母の前では良い娘を演じるつもりだ。

それから侍女は私の体にコルセットをあてがうと、思いつきり紐をきつく締めた。私は目を閉じてそれに耐えた。吐き気がするほど苦しかった。

「もっと腰を細くするの。もっと強く締めるのよ。貸しなさい」

母は侍女からコルセットの紐を受け取ると、ギリギリと紐を固く結んだ。私はたまらず息をもらした。あばらが折れてしまいそうだ。

気が遠くなりそうだ。

拷問に近い痛みに耐え、私は父からもったドレスを纏った。それはパールがかったシルクのドレス。白い生地だが若干黄みがかっている。優しい色合いだ。裾には貴族の間でも糸の宝石と名高いニードルレースのプント・イン・アリアがふんだんにあしらわれていて、流れるドレープは計算されつくした立体裁断によるもの。このように高級なものを着るのは初めてのことだ。

「あなたの髪色、目の色を計算して選んだのよ。このドレスがあなたの白肌を引き立ててくれる。華やかさを引き立ててくれる」

母は涼しい顔で私の茶色の髪をブラシでとかした。まるで嫁入り前の姉にしたように、丁寧にとかした。私の髪は、絹と見まごうほどに艶を帯びた。私は遠い日の姉を思った。

「今日は終始可憐に振舞いなさい。常に見られている事を意識する事。頭の中からつま先まで気を配るの。……良いわね？」

鏡越しに私を見る。

「はい」

「笑顔を絶やさない事」

私は母を見つめた。鏡に映る母は厳しい顔をしている。いつも通りの顔。

「母上のように？」

瞬時、母はうつとりとした笑顔を浮かべた。咲き誇る薔薇を連想させる。「そう、わたくしのように」

母を真似て、私は笑顔を作った。「こうですか？」

「宜しい」

頷くと、母はすぐさま笑みを消した。そして侍女に目配せし、踵を返して去っていった。

なぜか私は胸が痛んだ。コルセットに締め上げられた胸が苦しいのかもしれないけれど、必要以上に胸が痛んだ。身につけたドレスはため息が出そうなほど美しいけれど、なぜか心が壊れそうだった。底知れぬ不安に襲われていた。次第に涙が溢れてきた。

晩餐会は想像通り、目眩がしそうなほど豪華だった。豪奢なシャ
ンデリアもさることながら、宮廷人の身につける数々の鮮やかな宝
石に目を奪われた。それはспанコールとなって煌めいて宮殿を彩
り、彼らの宮廷衣裳を輝かせた。夢のような空間だ。

国王は満足そうに王妃を伴い現れた。後には姉やその他の愛人達
が続いた。

国王が堂々たる様で優雅に手を上げると、楽士たちの演奏が賑や
かに始まった。華やかなローブ・ア・ラ・フランセーズに身を包ん
だ貴婦人が、ブロケードのジュストコール姿の殿方と軽やかに踊っ
ている。

コルセツトの締めつけがきつすぎる私は、踊る気も失せ、壁に寄
り掛かってぼんやりと会場を見渡していた。

母に言い付けられたとおりの笑顔など作れなかった。楽しくもな
いのに笑う事などできなかった。一体誰に微笑めば良いのか。私に
はどうしても無理だ。頑張ることなどできそうもない。

遠くに父や母の姿が見える。国王と踊る姉、アンナの姿も見える。
アンリエットの伯父と踊る王妃の姿も見える。そして、いろいろな
男性と踊るアンリエットも見える。

アンナに再び視線を移す。彼女は笑顔をとたたえている。先ほど母
が鏡越しに私に見せた笑顔。あれに似ている。

きつと心から笑ってはいないのだろう。しかし姉は。私とは違う。
私なんかとは違う。アンナはエドワードに必要とされ、この国の王
にも必要とされている。エドワードが宮廷に戻ってきた時、まっ先
に彼が心から求めるのは誰だろう。それはアンナにほかならない。
彼が求めているもの。身近で彼らを見てきた私が一番知っている。

痛いほど知っている。彼らは二人で一つであることを知っている。元々私が入るスペースはなかった。彼の中に私は存在しない。どんなに恋い焦がれても、私は彼に求められない。

なら私は。私は誰かに必要とされているのだろうか。ただの道具としてではなく、生身の人間として、誰かに必要としてもらえているのだろうか。――否。必要とされていない。私は誰からも必要とされていない。私がいなくても、誰一人困らない。私の代わりはいくらでもいる。

言い様もない孤独感に襲われる。ドレスを纏ながらも、何故自分はここにいるのだろうか。どれほど考えても答えは見つからない。でも、言えることはここは私の居場所ではないという事。そもそも私の住んでいた田舎の城も、宮廷での居室も、何もかもすべて私の居場所ではない気がする。だったら私の居場所はどこだろうか。私の居場所は存在するのだろうか。居場所が欲しい。私は、自分の居場所が欲しい。

「踊っていただけませんか？」

声にはつと我に帰る。私はうつむいていたらしい。レースのついたじょうご型のブーツが見える。黒に白いレース。とても趣味がいい。顔を上げる。目の前に立つのはジャンだ。黒い髪のジャン・ペレアス。

いつのまに近づいたのだろうか。足音は聞こえなかった。

「ノエル、踊りませんか？」ジャンが私に手を差し伸べた。

胸がうるさく鼓動を早めた。静まれと、私は自分に命令した。静まって下さいと懇願した。波が引くように、私は冷静を取り戻した。彼の前では、なぜか冷静でいたかった。

「無理です」彼に耳打ちする。

「なぜですか？」彼が私に合わせて小声で言う。

「コルセットがきつくて。母に無理矢理締め付けられたの。誰より

も華やかに見えるように、ですって。そんな必要のないのに、無理に決まってるのに……笑えるわ」

彼は声に出して笑った。屈託のない笑みだ。

「どうりで今日の君は誰よりも美しく、しなやかに見えるわけだ」
子どものように眉を上げ、私の耳元で囁いた。「とても綺麗だ」

顔が熱くなるのが分かった。やっと静まった心臓が再び強く脈打った。なんとか手を固く結び、努めて冷静を装った。が、彼に私がどう映っているのかわからない。

「からかわないで。冗談を笑いとばせるほどの余裕はないの。それほど、今は苦しいの。倒れそう」

「分かった。でも、君と踊りたい」

ジャンは私の手を引いた。「1曲だけ」

ジャンはきつと踊りの名手だ。周りを見ると、立ち止まってこちらをじつと見る人の視線が突き刺さる。悪い視線ではない。あまりにも直接的な羨望の眼差しだ。踊りが苦手な私でも、翼をもつ鳥のようにふわりと舞えた。実際、浮いていると錯角した。周りの人からは、さも私もジャンと同じく踊りが上手く見えているだろう。

彼は1曲だけという約束を守り、曲が終わった時点で私の腰に手を添え、壁側に連れてきてくれた。貴婦人たちは彼と踊りたそうにもの欲しそうにこちらを見ている。私は喜びを感じた。生まれて初めて人に注目されたのだ。彼は極めて女性を美しく見せることができるのだろう。生まれながらの紳士だ。

「君は素敵だね」

ジャンがお世辞を言う。

「あなたのおかげよ」

彼は私の手の甲にキスをし、裏返して手の平に、そして手首にもキスをした。

「ちよつと、しすぎじゃないかしら」

たまりかねた私は彼を睨んだ。

「今日の僕は酔っているのかもしれない。それとも……君が素敵すぎるのかな」

私は笑うしかなかった。この状況をうまく切り返す方法を知らない。教わったことはない。

「ノエル、こちらへ」

ジャンは私の手を引き、裏庭へ私を誘い込もうとした。暗い、光の届かない暗闇へ。

「ちよつと、どこへ行くのよ!？」

私は青ざめた。伝え聞く、そして実際目にする、世の貴族達の自由と放埒^{ほうりつ}、退廃、快樂の追求を思った。ジャンも彼らと変わらないのだろうか。結局は骨の髄まで貴族なのだろうか。そう思うと急に怖くなった。脅えて、無理矢理手を振り解こうとした。

「ノエル」

気付いた彼は立ち止まった。

「ノエル、君は何か勘違いをしている」

「か、勘違いですって!？ 人気のない所に行つて、何をするつもり?」

ジャンは私の腰元を指差した。

「コルセット、苦しいんでしょ？ 君は今、青い顔をしている。今にも倒れそうだ。だから緩めるのを手伝うよ。一人では無理でしょ」
ジャンは首を傾げ、私に微笑む。「それにまだ君と踊りたい。踊り足りないんだ」

思わず赤面した。コルセットは下着だ。恋人や夫以外に見せられるものではない。しかし、事実締めつけすぎで倒れそうだ。

「なんであなたに……」

私は焦った。が、彼は私の肩に手を回し、歩を進めようとする。

「ちよつと、やめて！ 放して!」

「安心して」

彼は優しく私を見つめた。「僕は君と結婚するつもりだ」

一瞬、私の時間が止まった。永遠に止まりそうな気がした。息を

飲んだ。夢かと思った。

ジャンは私の髪にやさしく口づけた。

「だから恥ずかしがる必要はないと思う」

言葉が出ない。声を出せない。腰を抜かしそうになる。瞬間、彼は両手で私を支えた。

「実は踊る前に君の両親に伝えた」

私の肩に置かれたジャンの手に力が入った。「彼らは快諾したよ。君は来年僕の妻になるんだ」

血の気が引いた。私のいない所で結婚が決まってしまった。両親はこの上ない良縁に歓喜しただろう。何と言っても相手は名門貴族だ。父の思い通りの相手だ。

ジャンを見た。ジャンは宮廷でとても人気がある人だ。毎日貴婦人は彼を噂する。なぜそんな彼が私を？ どうして私なんかを？

私なんかと結婚しても、何のプラスにもならない。何の利益もない。頭がぐしゃぐしゃと混乱した。破裂しそうだ。

「ノエル？」

長身のジャンは、屈んで私を覗き込んだ。

姉を思った。そして、彼を思った。

「……エドワード」

無意識に、勝手に私の口は呟いていた。手の届かないあの人の名を。

あわてて口元を押さえた。遅かった。

息をのみ、彼を見やると、ジャンは悲しげに私を見ていた。

私は目を閉じるしかなかった。彼の顔を見ていられなかった。次第に涙が溢れて頬を伝った。

彼は、ジャンは親指でそれを拭ってくれた。その手は優しくかった。

しゆくしゆく足元が冷えていた。しゆくしゆく心が寒かった。気まずくないと言えは嘘になる。気まずいと言ってしまったも嘘になる。

裏庭で、私は佇んでいた。距離を置いてジャンも立っている。彼の目は暖かい。彼に見つめられていると、暖かくなる。

裏庭は暗いというわけではなかった。上を見上げると満月だ。ぼんやりとした光に縁どられて、壮麗に月が浮んでいる。月光が私を、ジャンを照らしている。目の前の彼は柔らかな陰影に刻まれて、息を飲むほどに幻想的だ。妖精かと思まごうほどに人間離れしている。あまりにも神聖で、この汚れた手では届きそうにもないと思ってしまう。私には彼に近づく勇氣はなく、その資格もないと思った。

「ねえノエル」

彼の口元が動いた。「僕にチャンスをくれないか？」

頭の悪い私は意味を理解する事は出来ない。そして、言葉も出て来ない。

「僕はね、君との結婚を取り下げても良いと思っている。君に好きな人がいるのなら、なかったことにしても良いと思っている」

ジャンはひとつ咳払いをした。「君に辛い思いはさせたくない。絶対にさせたくない」

私は黙って聞いていた。彼の目はあまりにも真剣で、目を逸らすことはできなかった。また逸らしたくないと思った。

「だけど僕は君を諦めたくない。君に好きな人がいても、諦められそうもない」彼はくしゃくしゃと髪をかきあげた。そして、再び私を見る。「だからチャンスが欲しい。どうしても欲しい」

私は声を絞り出した。「私は、何をすればいい？」ひどい声。自分で自分の声に呆れる。

ジャンは淡く笑みを浮かべた。

「クリスマス。……クリスマスまでは僕を好きになる努力をして欲しい。あと一カ月、君の心に少しでも僕を留めて欲しい。クリスマスに僕は君に会いに行く。そして、キスをする」

顔が熱くなった。『キツシング・ボウ』だ。ヤドリギの下、女性
は男性のキスを拒めない――。

「クリスマスに聞かせて欲しい。君の答えを聞かせて欲しい。それが始まりのキスなのか、別れのキスなのかを」

私は小さく頷いた。

ジャンは私に近づいてきた。怖がらせないようにしているのか、その歩みはゆつくりだ。

「それまで、僕の婚約者でいてくれる？」

彼を見た。変わらず暖かな目だ。貴族の、貴族特有の冷めた目ではない。優しさに満ちた灰色の瞳。

差し出された手に、私は手を乗せた。

「はい」

彼は目を伏せて、私の手を口元に運んだ。そして、手の甲に柔らかな彼の唇を感じた。

ジャンに呼ばれたペレアス家のお仕着せを着た侍女が、手際よく私のコルセットを緩めてくれた。そして終わるとすぐさまドレスを整えてくれた。家の侍女とは比べ物にならない上品な手つきに、私は素直に感動していた。

私は大きく息を吸い、大きく息を吐いてみた。体が軽やかになっていた。心も軽やかになっていた。つま先だけで立てそうなほど、自分の体が身軽に思えた。

ジャンは外で待っていた。私が戻ってくるのを待っていていた。満月を背景に、彼の立ち姿は絵画のようだ。

私はスカートをつまみ、彼の元に歩いていった。

「顔色が良くなった。楽になった？」

「ええ。ありがとう」

ジャンが差し出す腕に、添えるように手をかけた。

「では参りましょうか、婚約者殿。晩餐会へ」

微笑む彼に、私は微笑み返した。「はい」

月明かりの中、二人で歩く裏庭は、あまりにも素晴らしくて心が弾んだ。遠くから聞こえる晩餐会の喝采も、先ほどよりも何十倍も素敵に思えた。これから私は再びジャンと踊るのだろう。羽のように踊るのだろう。そう思うと嬉しさが込み上げてきた。

彼は私に歩調を合わせてくれていた。彼のエスコートは私を幸せにしてくれた。こんな気持ちには初めてな気がする。とにかく、夢のように体が軽い。背中に翼があるみたいに軽い。

ふいにジャンは私を見る。私は恥ずかしくてうつむいた。ちらり彼をうかがうと、未だ私を見つめていた。

「ノエル、僕の話聞いてくれる？」

「はい」

腕に添えた私の手を握り、彼は私のほうへ体を向けた。

「僕は君に謝りたいと思っている」

真面目な顔つきで私の髪に触れた。「こんなに突然、段階も踏まずに結婚を持ち出してしまった事、婚約という形になってしまった事」上から髪を撫で下ろす。何度も、何度も。

私は彼を見上げた。そして耳を傾けた。

「本当は時間をかけて君との仲を深めるつもりだった。クリスマスをきっかけに君を誘惑するつもりだった。そこから、始めようと思っていた」

ジャンは睫を伏せた。「だけど、今日の着飾った君はあまりにも

綺麗すぎて……。その、急がないと他の男にとられてしまうと思った」

屈んで、彼は私に目線を合わせた。私は彼を見つめた。真直ぐに「とられたくなかった。誰にも渡したくはなかった。君を誰よりも初めに知ったのは僕だと強く思った。だから急いで君の両親の元に行った。……正直に言くと、君の父上は快諾してくれると分かっていた。絶対の自信を持っていた」

ジャンは髪をくしゃくしゃとかきあげ、空笑いをした。「僕は愚かだな。自分の事しか考えてなかった。君の気持ちを無視していた。それを後になって気づくなんて」

「ジャン……」

「ノエル、許してくれる？ 僕のした事」

私には、長身の彼がほんの小さな子どもに見えた。たよりない幼い子どもに見えた。だから私は両手で彼の頬を包んだ。壊れ物を扱うように、安心させるように、愛でるように。

「許します。……初めから、怒ってません」

彼は私の両手を握りしめ、額を私の額につけた。「ありがとう」

ずっとそうしていた気がした。でも、私は疑問を拭えなかった。どうしても拭えなかった。なぜ彼ほどの人が私を？ どうして私なんかを？

聞きたかった。どうしても聞きたかった。今、この場で聞いておきたかった。だから私は口にした。

「ジャン、どうして私を？ なぜ私なんかと結婚したいと思うの？ あなたは愛する人としてしか結婚しないと言っていたけど……。私は何の取り柄もないだだの娘だわ。私にはなぜあなたが私を選ぶのかわからない」

彼は私に額をつけたままだった。彼の息を感じる。まばたきを感じる。

「僕は君と出会った時から、ずっと毎日君を見ていた。……知って

た？」

静かな、落ち着いた声。心地良い声。ずっと聞いていたい感じがして、私は目を閉じた。

「最初君を見て、可愛らしい娘だと思った。君の騎乗姿は愛らしかった。僕はそれだけで終わると思っていた。でも、違っていた。僕は毎日君が気になって、君の姿を追っていた。君の姿が見えないと、探したりもした。今思えば、僕は君に一目惚れしたんだと思う」

彼は顔を上げて、私の額にキスをした。唇を離し、そして続ける。「毎日君を見ているうちに、君は自分に正直である事を知った。素直な事も知った。慈悲深いことも知った。一生懸命なことも知った。君は貴族の中にあつて確固たる意志で風潮に流されず輝きを失わなかった。僕はそれを見て自分の事のように誇らしく思った。日々君を見つめる度、新しい発見をした。気づけば君に夢中になっていた。君しか目に映らなかった。もっと君を知りたいと思った」

ジャンは私をそつと抱きしめた。
「僕は君を愛している。僕の妻になる人は、君しかいないと思つて
いる」

私はジャンの胸に体を預けた。鼓動が体の隅々まで響いていた。
もう、何も考えられなかった。ただそうしていたかった。

私はこの日のことを、一生忘れないと思つた。この満月の夜を忘れないと思つた。

姉が私の居室に訪れたのは、三日後のことだった。白いファーに縁どられた深い緑色のベルベットのローブを纏う姉は、痛いほど壮絶な美しさで、教会に佇む聖テレジアを思わせた。

「ノエル、聞いたわ。あなた婚約したのね」

姉は私の茶色の髪を撫でた。姉に撫でられるのは何年ぶりだろうか。懐かしさが込み上げてきて、彼女に抱きつきたくなった。抱きつきたくてしよがなかつた。

「ええ、婚約したわ」

「小さかった私の妹が、とうとう結婚するのね」

私からではなく、姉が私を抱きしめた。私は彼女の背に手を回した。――細かつた。あまりにも。

「おめでとう……そう言ってもいい？」

「ええ、アンナ」

「ペレアス卿は良い人だわ。きっとあなたは幸せになる」姉の手に力がこもる。「幸せになって欲しい。あなたには不幸になんて欲しくない」

……私のように不幸になんて欲しくない。

そう、聞こえた気がした。姉の声が聞こえた気がした。

私は彼女を離したくないと思った。折れそうなほどに細い彼女を支えたいと思った。私は彼女を強く抱きしめた。そして、気づいた――。

「アンナ……」

彼女の小さな丸いお腹を。

「アンナ、妊娠しているの？」

「……ええ」

国王の庶子だ。

私は彼女の肩に手をのせ、彼女の顔をまじまじと見た。隅々まで見た。見慣れた目、眉、鼻、口、輪郭を。

決して幸せそうな顔ではなかつた。私の好きな緑色の目は曇っていた。彼女は変わらず美しいが、それは薄幸の美しさだ。悲壮美だ。愛している人と裂かれ、家のために結婚し、そして逆らえない国王の子どもを身ごもっている、私のただ一人の愛しい姉。

心が痛んだ。彼女は悲しみとは無縁の人だったのに、なぜこうも

悲しさを帯びてしまっているのか。なぜこのように過酷なことになってしまっているのか。なぜ彼女がこんな目にあわなければならないのか。

私は彼女を抱き寄せた。かつてエドワードがそうしていたように、エドワードになりきって彼女を抱きしめた。私にできる事はそれしかなかった。

アンナの温もりを、匂いを、鼓動を感じながら目を閉じた。

エドワードと笑いあっていたころの姉を思い出した。目に焼き付いて離れない二人の姿を思い出した。二人はとても輝きすぎて、眩しくて、私には手の届かない存在だった。親の言いなりにしかならなかった私にとって憧れだった。今も、そしてこれからも私は二人に憧れるだろう。恋い焦がれるだろう。エドワードを愛すると同時に私はアンナを愛していた。自分よりも愛していた。

姉の肩が震えるのが分かった。私の肩も震えている。これが泣かずにいられるだろうか。この現状を悲しまずにいられるだろうか。

「ノエル……暖かいわ」

姉は呟いた。それは消え入りそうな声だった。

私は彼女を抱きしめたまま、彼女の肩に顎を乗せた。彼女を抱きしめたまま、窓の外に視線を移した。

窓の外では、新たな愛人となったアンリエットが、国王とともに従者を連れて河畔を散歩しているのが見えた。私は齒がゆさを隠せず、ギリギリと悔しさを噛みしめた。新たな愛人が増えたとしても、王は姉を手放さないのだ。姉も新たな愛人もずっと側に置くのだろう。姉は見えない鎖に雁字搦めがんじがらになっている。

私はさらに強く姉を抱きしめた。彼女の震えを止めたかった。だけど私の手はあまりにも小さくて、震えを止める事はできなかった。私では無理だ。私ではアンナを救えない。

こぼれ落ちる涙を姉に気づかれたくなくて、窓ごしに青く澄んだ空を見上げた。いつか羽ばたきたいと思っていた空を眺めた。エドワードもこの空を見ているかもしれない。私は心の中でエドワード

を呼んだ。エドワードと叫んだ。――彼にこの声が届いて欲しい。ここに来て欲しい。来て、すぐさま姉をさらって欲しい。有無を言わず姉の手を引いて欲しい。姉を救い、彼女にはめられた茨いばらの指輪を打ち砕いて欲しい。打ち付けられた楔くさびを外して彼女に自由を与えて欲しい。十字軍で異教徒などと戦わず、姉の置かれている現状に戦いを挑んで欲しい。二人でこんなくだらない宮廷や貴族の柵しがらみから抜け出して逃げて欲しい。姉の笑顔を、快活さを取り戻して欲しい。お願いだから、そうして欲しい。

私の大切なアンナを守れるのは、彼しかない。エドワードしかない。

私はエドワードを思い続けた。優しい顔を、爽やかな笑顔を。

「お早う、僕の愛する人」

ジャンは満月の夜以降、毎日私に会いに来ていた。いつも私の手を取り、そつとキスをする。こんな甘い日が私に訪れるとは、考えてもみなかった。

ジャンはどこから見ても素敵な貴公子だ。宮廷内の貴婦人たちは、私にあからさまに嫉妬するし、王妃の居所でも侍女たちに無視される。意地悪をされる。アンリエットさえ私に近づいて来なかった。

でも、それでもいいと思っていた。不思議と孤独に思わなかった。かえって仕事に打ち込める。王妃に尽くす事ができる。

ジャンと私は回廊で肩を並べて立っている。会うと必ず彼は私の腰に手を回していた。彼の手の温もりを感じ、私は安心してた。彼の隣は居心地が良く、孤独ではないと思う事ができた。

「君は王妃殿下に相当気に入られているよ。父が言ってた」

「私が殿下に？　あなたのお父上、ラングレーズ侯爵がそうおっし

やっていたの？」

「うん。ちなみに彼は王妃殿下にもまして君を気に入っているんだ。僕の婚約者じゃなければ口説きたいほどだと言っていたよ」彼は得意げに私を覗き込んだ。「当然だね。この宮廷内、君を気に入らない者などいるだろうか。僕がこんなに夢中になる君を気に入らない者などいるだろうか。君は本当に素敵な娘だ」

私は嘖き出してしまう。ジャンは知らない。彼が婚約したことで、どれほどの貴婦人が嫉妬に狂っているのか知らない。きっと私は宮廷内でもっとも憎まれ、嫌われている。そう断言出来る。

「ねえノエル。父が君を城に招待したいと言っている。三日後、どうだろう。来てくれる？」

「ええ、行くわ。行っても良いの？」

ジャンは私の髪を持ち、ワインの香りを楽しむように匂いを嗅いだ。

「もちろん。僕の婚約者として」

私は彼のビロードのジュストコールの裾を持ち、復唱する。

「あなたの、婚約者として」

二日後、寒い夜だった。私は窓辺で頬杖をついていた。沸々と体の中から熱いものが込み上げてきて、心は満たされ、寒くてもさほど寒さを感じなかった。

ジャンの家に行くのは明日の晩だ。私はドレスを必死に考えていた。いまいち自分に似合う色が分からず、アンナに相談しようと思った。

私は生まれて初めて居場所を見つけた気がしていた。初めて必要とされている気がした。初めて生まれて良かったと思った。初めて

生きていると実感していた。

「ノエル」

声とともに思考は中断された。父の声だ。父が居室に入ってきた。この上もなく珍しい事に私は驚き、ガウンを下に落としてしまった。父は後ろに立つ従者に手で合図し、素早くガウンを拾わせた。

「婚約にこぎつけるとはな。うまくやったな、ノエル」

彼の顔には影が落ち、目は鋭い光を帯びている。「お前にしては上出来だ」

私の心臓は早鐘を打ち始めた。私は父が怖かった。昔からそう、父が怖い。畏怖している。

「父上、御存じですか？ アンナが……姉上が身籠りました」

「無論知っている。アンナはよくやっている」にべもなく言う。「お前も見習え」

私は拳を作り、震わせた。父に見えないように、見つからないように。

「ところでお前の結婚だが……」

父を見た。何かを企んでいる顔。

「破談にしようと思う」

聞き間違えかと思った。

「……父上、もう一度言ってください」

私を見据えた。「婚約は破棄する」

「破棄……？」

私は床に座り込んだ。床は氷のように冷たかった。

「なぜですか！？ なぜ勝手にそんな！」

激昂した。大きな声を出した。父に大声を出すのは初めてだ。彼に飛びかかろうと思った。飛びかかってその首元に掴みかけたいと思った。「彼を落とせと言ったのは誰ですか？ 彼を喜ばせると言ったのは誰ですか？ 他でもない、父上ではありませんか！ 決まった途端、ひどすぎます。ひどい……あなたはひどすぎる！ 勝

手すぎる！」

「だまれ、状況が変わった。お前は私に従えばいい。私の決定は絶対だ」

「理由を、理由を言っして下さい！」

父は冷めた目で私を睨み付ける。「結婚は家の一大事業だ。女が口を挟む事ではない。決めるのは私だ。とにかくお前の夫となるのはペレアス卿ではない」

私は勢い良く立った。床を蹴った。そのまま薄着で部屋を飛び出そうとした。

瞬間、父に腕を掴まれた。

「離して！」私はジャンに会いに行くのだ。

「ならぬ」父の力は強い。振り解こうにも振り解けない。

「離して！」私はジャンに会わなくてはならない。だから、叫ぶ。

「離して！」

口を押さえられた。私は二人の従者に取り押さえられた。もがいた。もがいて着衣が乱れた。

父は従者に顎をしゃくった。

「連れていけ。城へ」

窓の外、空が白んでいくのが分かった。闇は少しずつ姿を消した。夜が終わりを告げて、朝が音もなくやって来るのを感じた。陽は徐々に部屋を侵食し、私の顔を侵略し、目に到達して白く光った。見えてはいられない。眩しさに目を背けた。

シャンデリア。むき出しの天井。白い壁。姉と作ったリンゴの木のタペストリー。……ここは見慣れた私の部屋、ブリューネルの城。膝を抱えた。膝に頭を乗せた。お腹が痛む。顔が痛む。

どうなってしまったのか、何が起きてしまったのか、いくら考えても分からなかった。

腕を見つめた。青あざだらけの腕を見つめた。みすばらしくて、何の力もないと思った。何も抱えることはできないと思った。あざだらけの足も、こんな足では、彼の元に走る前に捕まってしまふと思った。

あれから従者に押さえつけられ、暴れてもがき叫び続けて、最後は父に顔を殴られ、お腹を殴られ気絶した。気づいた時にはここにいた。望まなくても、城の、ベッドの上にあった。

窓からはリンゴの木が見える。姉と遊んだ思い出の木。枝に宿るヤドリギが見える。私の、誕生花。こんな気分であれを見るとは思わなかった。こんな思いをしながらあれを見る事になるなんて、思ってもみなかった。

手を伸ばしてみる。小刻みに揺れている。幸せすぎて何でも掴めるとさえ思っていた手は、何にも掴めず、ただ虚空を彷徨うだけ。これが私の現実なのか、仕方のない事なのかと諦めようとする、それにも増して歯がゆさが込み上げ、悔しさにいてもたってもいられなくなる。沸々と彼への想いが溢れて出してくる。

一体何が起きてしまったのだろ。私の身に何が起きてしまったのだろ。私の周りで何が起きているのだろ。どうしても分から

ない。

頭をくしゃくしゃと掻きむしった。髪を乱したまま扉へ向かった。けれど扉に立つ屈強の従者に止められ、力では適わない。抗えはしない。

自分の無力さを噛みしめ、ただ目を閉じた。方法があるはずだ。この現状を抜け出す方法があるはずだ。教えて欲しい。助けて欲しい。無力だとしても、私は絶対諦めきれない。たとえ死んだとしても諦めたくはない。

彼を思った。彼の笑顔を思い浮かべた。初めて私を必要とし、求めてくれた彼を思った。愛を語ってくれた彼を思った。私の中は彼で占められていて、彼の事しか考えられなかった。彼のことでいっぱいだった。

彼の名を口にする。何度も何度も口にしてみる。けれど声は出ず、唇が動くだけ。嚙れてしまった私の声は、彼の名を呼ぶ事が出来ない。それでも、諦められない。だから私は口にする。

——ジャン。

日は沈み、夜が訪れた。窓越しに夜空を見上げた。雲は星を隠してしまつて、瞬きは見えなかった。朧げな月は寂しげに庭を照らし、木を断頭台のように見せていた。不気味さに、背筋が凍った。

今頃私はラングレース侯爵の城にいるはずだった。侯爵の城でジャンの隣にいるはずだった。姉に相談して選んだドレスを着て、彼と笑っているはずだった。けれども私は一人きりだ。私はここにいない。ブリュネルの城にいる。

眠れるはずはなかった。眠る気などさらさらなかった。いつこの城を抜け出すチャンスがくるのかわからない。私の部屋には二人の

従者が常にいて、彼らは私を監視している。父に命令されて、厳しい顔して立っている。戦争に赴く兵士のよう。それでも私は待っている。チャンスがくるのを待ち望んでいる。きつとくるはず。私はそう信じるしかなかった。希望を捨てる気はなかった。

やがて再び朝がきて、再び夜がやってきた。食事を用意されるけれど、食べる気もなく、ただ膝を抱えた。じつと扉を睨み続けた。

次の日、父と母が部屋にやって来た。私は彼らの顔など見たくはない。目を逸らし、目を伏せた。彼らなど、親とは思いたくはない。「ひどい顔、ひどい体。……あなた、いくらなんでもこれはひどいわ。どんな力で殴ったの」

母はスツールに私を座らせ、しかめ面で父を睨んだ。「アンナの偉功を受け、ノエルの人気はうなぎ上りなのよ。御存じ？」私の顔の傷に触れた。「なのにこれでは人前に出せない。恥ずかしくて出す事はできない。わたくしの娘だとは言えない。あざが治らなければどうするの？ あなた、どうするつもりなの？」

父は鏡越しに私をべつすると、興味なさげに母を見た。

「ノエルは病気という事になっている。皆、そう思っている。あざなど1週間もすれば治る。元通りになる。お前は口を出さずに黙っている」

私の顎を持ち、母は私の顔にせわしく白粉おしろいをはたいた。「無理ね、やはりあざは消えないわ。手はクラブで隠せるとしても、顔は無理」

父はイライラと足を鳴らした。「だから言っているだろう。今は目立っても、じきにあざは消える。元通りになる」

「でもあなた。ダグラス公爵に会うのは三日後なのよ？ ノエルがこんな状態では会わせられないわ」

「ノエルは病気で伏せている事にすれば良い。後日、日を改めれば良い」

鏡越しに二人を見た。自分が人ではなく物のように思えた。ダグ

ラス公爵……嫌な予感がする。暑くもないのに汗が出てくる。

「……母上、ダグラス公爵とはどなたですか？　なぜ私はその方に会うのですか？」

ガラガラに囁れてはいるが、声は出た。母は私の声に不快感をあらわにした。「何なのノエル、その声は。嫌だわ、老婆みたいじゃないの」

母の代わりに父が答えた。相変わらず冷めた目をしている。「ダグラス公爵は国王の異母弟だ。先月スペインから戻って来られた。王の口添えでお前は誰もが羨む結婚をする。考えられぬほどの地位を得る。我が家は大貴族となる。お前は公爵夫人となるのだ」父がニヤリとほくそ笑む。「アンナのおかげだ。そしてあれが男児を生めば、さらに家は繁栄する。あれは一度男児を生んだ。次も男を生むだろう」

頭が真っ白になった。なにも考えられない。ジャンを思った。アンナを思った。血が急速に煮えたぎる。押さえきれなくなる。

椅子を蹴飛ばした。母の手をなぎ払った。父の首元のレースを掴み、思いつき揺り動かした。

「私は――」

咄嗟に私は従者に取り押さえられた。もがいたけれど、全てが、何もかもが無駄だった。

従者に羽交締めにもされても、父を睨み、母を睨んだ。喉が潰れてもかまわない。私は叫んだ。

「私は結婚などしない！　公爵などと結婚しない！　私が嫁ぐ先は決まってる。もう決まってる！」

頬が熱くなり、髪がちぎれそんな感覚が襲ってきた。お腹に鋭い痛みが走った。壁に叩き付けられ、頭に鈍痛が走り、出すつもりはないのにくぐもった声が出た。血の味がした。口に手をやると血がついた。あまりの痛さに気が遠くなった。

「あなた、もうおやめになったら？　これ以上殴っては、ノエルにもしものがあつたらどうするの。公爵や国王に顔向け出来なく

なるわ」

冷静な声で母が言う。

父は私の髪を鷲掴みにし、私の顔を引き上げた。そして顔が触れそうなほどに顔を寄せてきた。

「愚かな娘だ。なぜこの結婚を喜ばぬ。お前は世が羨む最高の結婚をするのだ。お前の姉よりも良い結婚だ。公爵夫人だ」さらに髪を強く握る。「お前は受け入れるしかない。お前に決定権があるとは思うな。女に権利があると思うな。そんなもの、初めからない。従順に従う事こそお前の勤めだ。それが貴族だ。お前は私に従えばいい」

鼻には父の香水が届いた。吐き気がした。彼の顔に唾をかけてやりたいと思った。

「嫌です！ 私は自分の結婚は自分で決める。あなたの言いなりにはなりたくない！」

「もう決まった事。事実はどうな事があってもくつがえらない。私の決定は絶対だ。忘れるな、お前は貴族。生まれながらの貴族だ」

幾日の日が過ぎたのだろうか。幾晩の夜を数えたのだろうか。監視が続く中、私は膝を抱えて窓だけを見つめていた。窓の外には雪が降り、クリスマスが近づいたのかもしれないと思った。誕生日はすぐそこかもしれないと思った。気持ちはただ焦っていた。

目を凝らして雪に霞むリンゴの木を見た。そして枝の間に茂っているヤドリギを見た。目を閉じて、宮殿の庭園を散歩したことを思い出した。キッシング・ボウだと言っていたジャンの姿を思い出した。

無性に彼に会いたくなった。どうしても会いたいと思った。会っ

て抱き締められたい。そして、キスをして欲しい。

泣けてきた。涙はとめどなく流れ落ちた。止まらなかった。もう止められそうにもない。私は彼に会えるのだろうか。会いたい。どうしても会いたい。

ろくに眠れず、食事も喉を通らず、窓に映る私の顔は疲労と苦悩が浮んでいた。このまま痩せて衰えて、しわしわになってしまえば、結婚せずにすむかもしれない。公爵などと結婚せずにすむかもしれない。

風になりたい。鳥になりたい。翼があれば、今すぐここから出て行けるだろう。彼に会いに行けるだろう。

どうして私は貴族なのだろうか。なぜ自由になれないのだろうか。いくら神に祈ろうと、私の願いは聞き届けられない。願いは叶いそうにもない。

暗い事ばかり考えた。世の中を呪い続けた。生きる意味など見出せなくなっていた。生きていくはないと思った。

いつそ死んでしまえば、魂だけでも彼の元に行きつくことができかもしれない。傍にいられるかもしれない。そう、思う。

ポケットに手を入れ、ロザリオの鎖をたぐり寄せ、私は握りしめて祈りを捧げた。そうせずにはいられなかった。叶わないと分かっている。願わずにはいられない――

「ここにノエルがいるでしょう？ 通してくれないかしら」

「なりません、伯爵命令です」

「黙りなさい。私が誰だか知っているでしょう？ このお腹の子が誰の子かは知っているでしょう？ 職を失いたくなければ退きなさい」

扉の向こうで声が聞こえた。私は耳を疑った。愛しい声、アンナの声。

声色は氷そのものだつた。鋭さを帯びていた。しかし、その冷たさが逆に私を暖かく包み込む。喻えられないほど暖かくする。姉が扉を開けて入ってきた。身重にもかかわらず私の元に駆け寄ってきた。私は彼女に抱きついて、気づけば声をあげて泣いていた。姉は何も話さずに、私の頭を撫でてくれた。長く湯あみもしない汚い頭を、彼女は優しく撫で続けてくれた。

「あなたたち、部屋を今すぐ出てくれないかしら」

姉は戸口を固める従者を見ずに言う。目にする価値もないとばかりに。「妹に湯あみをさせたいの。分かったら早く出て行きなさい」従者は動かなかった。表情すら変えなかった。心がない石像のように、ただ真直ぐ前を見続けていた。

姉はさらに私を強く抱きしめた。私は彼女の胸に顔を埋めた。

「まさかとは思うけど、このまま私の声を無視して父の命令通りにそこに立っているつもり？ 答えなさい」

三人の従者のうちの一人が答える。

「いえ、そんなつもりは……。しかし、我々は――」

「しかし我々は、ですって？ 恥を知りなさい。あなたはどんな教育を受けてきたの？ 下品にも貴婦人の入浴を盗み見るような教育を？」

「我々は命令に従わねばなりません」

「だから私が命令しているのです。出て行きなさい！」

「……では、入浴が終わるまでの間、失礼します」

彼らは一礼してから扉に消えた。

姉は顔に落ちた金の髪を耳にかけ、盛大にため息をついた。

「やっと去ってくれたわね。息が詰まるわ。あなたはずっとこの状態でここにいたの？」

私が頷くと、姉は眉間にしわを寄せた。「ひどい、牢獄みたいじゃないの。父上はどういう見なの？ あなたを男に監視させるな

んて」

私は姉の腕にしがみついたまま、彼女の肩に頭を乗せた。

「アンナ、怒られない？ 彼らを追い払ってしまつては、アンナが父上に怒られない？ 私は嫌。アンナが怒られるのは嫌。ねえ、大丈夫？」

姉は私の頭に手を回した。「馬鹿ね、あなたは何も心配しないでいいの。父上も母上も今は宮廷にいるわ。ここにはいないの。それに私は国王の愛人だわ。権力を手に入れた。望まなくても手に入れた。どう使おうと、誰にも文句は言えないわ。言わせない。だから私は好きなようにする。そう、決めたの。好きなようにするわ」私の髪を弄んだ。「ねえノエル。私が変わったのはあなたのおかげよ。あなたに抱き締められて、私は変わった。今までの自分じゃないみたい。不思議ね、あなたは私の妹なのに、あの時、私はあなたに守られているような気がしたの。勇気が出たの。だから今度は私があなたを守る。絶対守るわ」

姉は私の頬に触れ、手に触れ、足に触れた。

「瘦せたし、顔色は悪いし、あざはあるし……。辛かったわね、ノエル」彼女は涙ぐみ、再び私の頭を撫でた。「辛かったわね」

姉に命令された侍女たちが、私の部屋にお風呂を用意してくれた。私は姉に言われるままに、いい香りのするお湯に浸かった。浴槽の縁に頭をもたせると、姉が丁寧に洗ってくれた。櫛で丁寧にとかしにくれた。

「ノエル。私、来るのが遅くなつてしまったわね。もっと早く来るつもりだったのに。……ごめんね、陛下がここへ来るのを許してくださるのを待っていたの」姉はお湯を手ですくい、さらさらと浴槽に落とした。「……あの夜、ノエルの声が聞こえたわ。あなたは勇敢にも父上に逆らっていた。驚いたわ。そして激しい物音の後、ぐったりとしたあなたが馬車に乗せられた。宮廷から連れていかれた」私はお湯に浸かったまま、声を殺して涙を流した。

「追いかけたけど無理だった。お腹が重いと不便だわ。忌々しい。馬にもうまく乗れやしない。追いかけたくても追いかけられない」

「アンナ……ありがとう」涙を拭い、姉を見た。

「……ジャンは？ ペレアス卿は？ 彼はどうしてる？」

姉は肩をすくめてみせた。「変わらず飄々としているわ。あの人がつてすごいわね。感情をおくびにも出さないの。辛くても出さないの。根っからの貴族だわ」唇を私の耳に近づけ、囁いた。「彼からあなたに伝言があるの。……聞きたい？」

私が頷くと、姉は誰にも聞こえぬように手を添えた。「こんな事になってしまったけれど、変わらず君を愛している……ですって。私、複雑な気分になったわ。で、あなたはどのなの？ ノエル」

私はジャンを思った。彼との満月の夜を思った。思い出し、深く息を吸い込み、お腹の底から吐き出した。胸が高鳴るのが分かった。緊張しているのが分かった。体が熱くなるのを感じた。私は濡れた手で姉の腕を掴んだ。

「私も……私も彼を愛してます」

「ふふ、言ったわね」

姉は笑った。久しぶりに見る、屈託のない笑み。「良かった。私に来たのは無駄じゃないのね。来て良かった。私、あなたに協力するわ。なんでもする」

「あなたの望みを聞かせてくれる？」

ナイトガウン姿の姉は、お腹を庇いつつベッドに体を横たえた。

私は衣擦れの音をさせ、彼女の隣に滑り込んだ。

「クリスマスに会いたい。ジャンに会いたい。一目だけでもいい、彼に会いたい」

姉は大きく瞬きをした。「ペレアス卿に会いたいね。彼はクリスマスは宮廷にいないはずよ。きつとお父上、ラングレース侯爵の城にいるわ。行く覚悟はある？ 今回の婚約破棄の件、侯爵はどう思っているのか分からない。今の父上と侯爵の関係、そしてダグラス公の関係は分からない。……それでも行く勇氣はある？」

私が迷わず首を縦に振ると、姉は私の顔にかかる髪をつまんで横に退かしてくれた。優しい目。私の好きな緑色。「ここから彼の城は遠いわよ？ 雪がこれ以上積もらなければいいのだけれど。つらい旅になるかもしれないわよ？ がんばれる？」

「どんなことでもする。雪なんかどうでもいい。ジャンに会いたい」
姉が手の甲で頬に触れた。「分かったわ。クリスマスは一週間後。私は前日宮廷に戻り、父上や母上を足留めする。この城の従者を追い払うわ。ノエルはその隙に城を出るのよ。いい？」

私は頷いた。顔を上げた途端、姉に鼻をつままれた。「その代わり私がいる間、ちゃんと養生しなさいね。しっかり眠る事。食事をする事。喉を休める事。心を落ち着かせる事。……いい？」

再び私は頷いた。

「ありがとうアンナ。本当にありがとう。どんなに感謝しているか……この気持ちをどう伝えればいい？ うまく言葉に出来そうになり。私がアンナのために出来る事は？ 私に出来る事は何かない？」

姉は毛布をかぶり、私にもかけた。私は姉の傍に寄り添った。

「なにもないわよ、ノエル。私のために何もする必要はない。ただ、

あなたは笑っていればそれでいい。あなたが笑っているのなら、私はそれで十分よ。見返りなんかいらないの」「安心させるように、姉は私の腕を優しくさすった。「あなたは自由でいて欲しい。私にとつて、いつだつてあなたは眩しい存在。私は自由なあなたに憧れている。そして大切に思っているわ。大切な私のかわいい妹。姉として出来る事があれば、私は何だつてしたいのよ。そう思ってる」

私は顔を上げた。「アンナ、私は――」

「ねえノエル。覚えている？ 私にエドワードと逃げろと言った時の事」

姉は目を閉じ、口角を上げた。えくぼが浮んだ。「あの時、ウェストン卿と結婚などせず、あなたが言っていた通りに駆け落ちしていたら、私はどうなっていたのかしら。……最近になって思うの。私にその勇気があったなら、どうなっていたのかしら。いずれにしても、今とは違う人生ね。愛する人の傍で過ごせたら、どんな未来が待っていたのかしら。彼の子を生む時、彼の子を抱く時、どんな気持ちなのかしら」

えくぼを消し、目を開けた。「小さなあなたは手伝ってくれといったのに、私は愚かな憶病者だった。あの時、私は自分で自分の幸せを放棄したのね」

「アンナ……」

「今なら思うわ。私は貴族であっても、意志を持つ人間。人が愛を夢見て、望んで、何が悪いのかしらね。人として感情があるのは当然だわ。それなのに私は大切な事を忘れてしまっていたのよ。貴族って何なのかしら。生きていても、生きていないみたいだわ。そして私もそうだった」

姉は私の手を両手で包み、握った。

「ねえ、手伝いたい。手伝わせて欲しい。そしてこの目で見たいのよ。あなたには愛を貰いて欲しい。私の分まで愛のために生きて欲しい。私はそれを糧に生きていける。真直ぐ前を見て生きていける。あなたを思い、勇気をもらって、これから自由に生きていくわ」

その晩、私は姉の手を離さなかった。姉もまた、私の手を離さなかった。

暖かく柔らかい手は、昔から変わらなかった。私にとって変わる事はない。いつまでも変わらない。

日は昇り、外からはくぐもった鐘の音が聞こえた。礼拝の時間だ。私は部屋で姉と肩を並べ、膝を折り、神に祈りを捧げていた。

私は祈った。姉の未来を、エドワードの無事を、そして、ジャンの事を。

目を開けると姉はまだ祈っていた。しばらく後、顔を上げた姉と目が合った。「何を祈っていたの？」

「秘密。ノエルはなにを祈ったの？」

私は口元に指を立てた。「秘密」

「まあ！ 生意気ね」

姉は私の左頬にキスをした。右頬にも。「明日はあなたの誕生日ね。早いけどおめでとう」

「アンナ、ありがとう」

姉とゆっくり食事をした。暖かなスープやパンは、この上なく美味しく思えた。時々私たちは目を合わせ、合図するように微笑んだ。「ノエル、私は行くわ。これから宮廷に行く。この城の従者を連れて行くわ。齒向う事など許さない。駄々をこねても連れて行く。いやらしいでしょう？ 私は権力をふりかざすの」

楽しそうにくすくすと笑った。いたずらに眉を上げる。「どう？ 明日のクリスマスは侍女しかない。城を守るわずかな従者しか

いない。もちろんうまくやれるでしょう？ 私の妹ならできるはず。あなたならできるはず」

私は席を立ち、彼女に抱きついた。

「私はアンナの妹だもの。私に出来ないはずはない。私はうまくやる。やってみせるわ」

姉は私の背に手を回した。優しい香りが鼻に届いた。

「後悔のないようにしっかりね。自分に正直になるのよ。何がおきても自由でいてね。私はいつでもあなたを思ってる。どんな時でも思ってる。辛い事があっても忘れないで。あなたを大切に思っている人がいることを……」

「アンナ、私も。私もいつでもあなたを思ってる。あなたはいつだって私の憧れ。アンナも忘れないで。辛い事があっても忘れないでね。私はあなたを大切に思っている。どんな時でもあなたを思うわだから、自分を大切にしてね。お願いだから大切にして」

私はポケットの口ザリオを取り出すと、姉の手に握らせた。

姉は微笑み、首につけた。「大切にするわ」

午後、姉は城を後にした。有無を言わず、ブリューネルの城にいる従者を引き連れて城を後にした。

彼女の真直ぐに伸びた背中中は美しかった。威厳に満ちて、神々しかった。悲しみや悲愴は形をひそめ、彼女の先には希望が見えた。未来へつながる夢が見えた。

眩しくて目を細めた。彼女の妹である自分が誇らしく思えた。喜びを世界に知らしめたいと思った。私は彼女の妹である事に感謝した。

私は彼女の後ろ姿をずっと覚えておこうと思った。目に焼きつけておこうと思った。彼女の姿が見えなくなっても、いつまでも見送り続けた。吐く息が白くても寒くはなかった。私には彼女がくれた温もりが残されている。

「アンナ」

誰もいなくても彼女を呼んだ。もう一度、大切な名前を。「アンナ」

遠くで子どもたちのはしゃぐ声が聞こえる。クリスマスを祝う鐘の音が聞こえる。目を覚ました私は思いきり伸びをした。クリスマスイブ。今日から17歳だ。

窓の外は一面が銀世界。太陽を反射して宝石みたいに煌めいている。美しさに息をのみ、これからの自分に思いを馳せた。

ジャンは突然城に訪ねたら驚くだろうか。それとも喜んでくれるだろうか。彼は言っていたとおり私にキスしてくれるだろうか。あの日のように抱きしめてくれるだろうか。それとも彼は、私との婚約が無くなり、新たな娘に恋をしているだろうか。愛を交わしているだろうか。私を忘れてしまっているだろうか――。

ため息をつき、頭を振った。暗い考えの自分を諫めた。大切なのは私の気持ちだ。彼がどうであつたとしても、私はまず行動しなければならぬ。行動して彼に伝えなければならぬ。私の、この気持ち。

目的もなくそわそわと動き回った。じつとしてはいらなかった。鏡の前に立ち、自分を映し、笑ってみた。ぎこちなかった。

まだ少しあざが残っている。白粉をはたいてあざを隠した。幸い、目立たなくなってくれた。しかし手や足は白粉では隠せず、レースのついたグラブと、絹の編み靴下を用意した。

日が落ちたら、夜になったら、私はジャン会いに行く。何が起きても会いに行く。闇が私を隠してくれるだろう。守ってくれるだろう。

「お出かけですか？」

昼過ぎ、部屋に入って来た侍女が言う。無理もない、私は乗馬服に身を包んでいる。ふかふかの毛皮がついたケープを身に纏っている。

「ええ、出かけるわ。夜、馬にのって教会に。出来たばかりのバロツク様式の教会が見たいの。美しく灯された蠟燭ろうそくが見たいの。聖歌隊の美しい歌声を聞こうと思うの。姉によると素晴らしいらしいし、それに今日は私の誕生日。思いつき楽しみたいわ」誕生日という言葉を強調した。彼女に私の企みを知られるわけにはいかない。

「おめでとうございます」彼女は丁寧に頭を下げる。「護衛にトマスを呼びましょうか。彼は今、休暇で家に待機しています」

私は慌てた。トマスとは父に忠実な従者だ。そして、目の前の侍女の夫だ。

「護衛はいらないわ。知っているでしょう？ 私はこれまでずっと従者に囲まれていたのよ。うんざりしているの。今日の誕生日くらい一人でいたいわ。自由でいたい」

「危険ではないですか？ あなたにもしものことが――」

「大丈夫よ。教会に行つて真直ぐ帰ってくるだけ。よく知った道を通つて行くわ。心配しないで」

侍女は私に微笑んだ。「そうですか。良いお誕生日をお迎え下さい。あなたは来年ご結婚されると聞いております。私は夫ともどもあなたの幸せを祈ります。どうか幸運を」

「ありがとう。マーサ」彼女の名前を言う。「お願いがあるのだけれど」私は空っぽのバスケットを手渡した。「これに食事を用意してくれないかしら？ 教会に持つて行こうと思うの。教会の子ども達と一緒に食べるわ」

マーサはバスケットを腕にかけ、一礼した。「喜んで。夕方までに用意いたします」

夜になるのは早かった。私はマーサが用意してくれた食事の入っ

たバスケットに、ありったけの宝石をつめた。なんとなくそうしたい気がした。ジャンまでの道は遠い。風に飛ばされないよう、ケーブをリボンで固定した。

緊張していないと言えは嘘になる。不安でないと言えは嘘になる。私は彼に会いに行く。会いたいから会いに行く。けれどもその後の事は分らない。彼に会って、その後のことは考えてない。この先どうなるのか、公爵とどうなってしまうのか、まだ先の事は考えられない。今はただ、彼に会う事だけを考えている。

人目を避けて、表ではなく、下働きの者が使うドアから外へ飛び出した。息を吸った。空気は澄んでいる。雪をさくさく踏み締めて、厩に忍び寄り、乗り馴れた韋毛の馬を選んだ。馬はフレームンをおこなって、あたかも笑っているかのような表情を見せた。私は馬の顔に触れ、口元にニンジン運んだ。そして囁いた。「よろしくね、ケリー」

馬を連れ、濠を歩いた。歩いているうちに、姉とポニーに乗って遊んだ事を思い出した。十字軍になりきって駆けた事を思い出した。私たちは勇ましい騎士だった。それから愛しい恋人たち、エドワードと姉の騎乗姿を思い出した。彼らの笑い声を思い出した。幸せが広がって、懐かしさのため息が出た。

小川のほとりの平らな草むらを見た。私がよく本を読んでいた所に雪に覆われて見えないけれど、姉と寝転び遊んだ所。姉と笑いあった所。バスケットに入ったパンと一緒に頬張った所。

雪の上に落ちた小枝を拾った。私は手を伸ばして枝を振りかざした。かつてそれは姉や私の剣だった。十字軍の剣だった。私は剣に祈りを込めて、口づけをした。

——私に勇気を下さい。彼に会う勇気を。たとえ足蹴にされても彼がもたらす事実を受け入れる勇気を……。アンナのくれたこのチャンス、希望を生かす勇気を。

上を見上げた。満月だった。あの日と同じ満月だ。あの日と変わ

らず、壮麗で美しい月。息を飲むほどに見事な月。雲間にぽつかりと浮ぶ月。涙は溢れそうになった。

私は思い出していた。エドワードを想い、姉を想い、宮廷へ想いを馳せていた時に見た月を。ジャンが私に愛を教えてくれた時に見た月を。

知らぬ間に口は呟いた。「ジャン……」

月光に照らされたリンゴの木に目を向けた。リンゴの木の影は雪の上に延び、私の足元に到達している。リンゴの枝を見た。私の誕生花、ヤドリギが茂っている。寄生するヤドリギに手を伸ばし、私はその実をひと粒手にした。手が震えた。そして目を閉じ、実にキスをした。

雪を踏み締める音が聞こえた。小枝が折れる音が聞こえた。馬の微かないななきが聞こえた。私はゆっくりと目を開け、音のするほうを見た。

実を落としてしまった。腕にかけたバスケットが落ちてしまった。馬を引く手綱を離してしまった。頭が真っ白になり、私は立ちつくした。

頬に涙が伝った。体がガタガタと震えた。何も考えられず、まばたきも忘れた。

「ノエル、どちらへ？」

闇夜に小さく声が響いた。私は息を飲み、両手で口を覆った。

背の高いシルエツトが見える。サラサラな黒髪が見える。布を豊かに使ったケープが見える。肉付きの良い黒い馬が見える。私は立つてはいられなくなり、その場にへなへなと座ってしまった。

「どうして…… どうしてここに？ なぜいるの？」

馬から軽やかに降りた彼は、杭に馬を繋ぎ、ケープをはためかせ、

私の元に歩いて来た。雪を踏む音、身に纏う衣裳の擦れる音、彼がもたらす物音すべてが愛しいと思った。

「僕の言葉を覚えてる？」

私は頷いた。何度も頷いた。涙がにじんで彼の顔を上手く見ることができない。袖で拭いても拭いても涙を押さえる事が出来ない。

彼は私を軽々と抱き上げて立たせてくれた。そしてヤドリギに近づくと、実をひと粒とり、屈んで私の顔を覗き込んだ。

「ノエル、僕は君を愛してます」

「ジャン、私――」

震えていた私の唇が暖かくなった。体の芯まで熱が満ちた。あまりの幸せに後ろに倒れそうになり、すぐさま彼は私を支えた。私は力を抜いて彼に身を預けた。彼を求めて上を向くと、すぐさま彼は答えてくれた。その間ずっと唇は離れなかった。リンゴの木に宿るヤドリギのもと、キツシング・ボウ。

しばらく後、彼は私から顔を離すと、身をずらし、壊れそうなほど強く抱きしめてくれた。嬉しさに、私は彼の首にしがみつき、いつのまにか声を上げて泣いてしまった。

「ねえノエル。返事を聞かせてくれないか？ 始まりのキスなのか、別れのキスなのか」

ジャンは私を抱いたまま耳元で小さく言った。手は泣きじゃくる私をあやすように、優しく髪を撫でている。

「ジャン、私は……私は公爵と……」うまく言葉に出来ない。言葉を探した。「父に公爵と結婚しろと言われているけど……私は、まだあなたと婚約していると思うているの。私はあなたの婚約者でいたい」ジャンの肩を持ち、ぐいと上体を離した。「あなたは……どう思ってる？」

ジャンは私の頭に手を添え、再び私を抱きしめた。

「先に僕の問いに答えてくれないか。始まりか終わりか、言ってみて？」

私は彼のケープをくしゃくしゃと握りしめ、彼を引き剥がし、彼の耳元で大声を出した。

「そんなの初めから決まってる！ イエスよ！ 別れのキスのわけがない。だって私は――」

私の口は再び彼に塞がれた。私は彼の首に手を回し、二度と離さないでおこうと思った。

ジャンは私をふわりと持ち上げて、馬に乗せてくれた。葦毛の馬はつぶらな瞳で、じっと立って待っていた。

彼は私の手を持ち、手の甲にキスをした。「誕生日おめでとう」かがみ、スカートをどかし、ブーツにまでもキスをする。「これからは君の誕生日を毎年そばで祝うよ」

その言葉が夢のようであって、私は何も言えなかった。頭は終始、空を彷徨っていた。

踵を返し、馬へと向かう。彼は鎧あぶみを踏み締め、鞍に跨がると、私に目配せをして優しく笑んだ。

「行こう、僕の愛する人」

私も笑った。どこに行くのかわからないけれど、それでも良かった。彼がいるのなら、どこでも良いと思った。

「はい。私の愛する人」

月明かりに照らされた彼は、やはりあの日と同じ幻想的で、私は頬が火照るのを感じながら、うつとりと彼を眺めた。馬にのる姿は宗教画で見る神の使いの騎士としか思えず、これが私の愛する人なのだと、隅々まで眺めた。

「ノエル」ジャンは照れくさそうに手綱を操作し、私のそばに馬をつけた。「今の言葉、もう一度言ってみて」

「えっ」

私は慌て、ぐらついてしまったが、馬にしがみついて体制を整えた。「もう一度……言つの？」

「うん。もう一度」

私は深呼吸をした。鼓動の音がうるさかった。恥ずかしくて目を伏せた。せき払いした。

「ジャン、私の愛する人……」

しばらく沈黙が続き、不思議に思っ て顔を上げると、吸い込まれそうな灰色の瞳と目が合った。

「うん、僕は君の愛する人だ」満足そうに目を細めた。「君は僕を愛してくれる。僕はそんな君を一生愛していく。今日と変わらず、強い気持ちでずっと君を愛し続けるよ」

体が疼いた。急に彼に飛びつきたくなった。飛びついてキスしなくなった。でも、我慢した。この気持ちをどうしよう。押さえられない。せめて言葉で。私は彼に向かって言った。

「私も、私も死ぬまであなたを愛します。愛し続けるわ!」

ジャンはうつむき、眉間を手で押さえて頭を振った。「……なんだこれ、やばいね。やばいくらいに幸せだ。理性が無くなりそう」私も負けずに彼に言う。「私だってやばいくらいに幸せだわ。どうしてくれるの? ああ、ジャン、大好きよ!」もう一度言う。「大好き!」

「……え、大好きだって?」ジャンは顔を上げ、わざとらしく首を傾げた。子どもがいたずらを企んでいるような、そんな顔つきだ。

「ひどいなノエル。大好き?僕は君を愛してると言っているのに、君は僕を好きだって?愛と好きは違い過ぎる。それじゃ軽すぎる。君の気持ちは僕よりも遥かに軽いんだね」

「何言ってるの?私も言ったわ。あなたを愛してるって言った。軽くないかな」

「いや、僕のほうが数が多い。何度も何度も言っている。夜眠る時

も頭の中で言っているし、夢でさえも言っている。だから君も僕に負けずにたくさん言うべきだ。僕に何度も言うべきだ。これからは傍で君の声が聞きたい。愛を聞きたい。分かった？ 僕の愛しい人」

私はバスケットからリングを取り出し、彼に放った。「あなたって子どもみたいだわ！ 私は数で勝負しない。中身で勝負するの。だから私の言葉はあなたよりも重いよ。絶対重いに決まってる」

リングを宙で軽々と掴んでいた彼は、音を立ててかじってみせた。「僕の城へ行こう」口の中に残るリングを噛みしめ、飲み込んだ。

「父に伝える。国王陛下に許しを請う。もしも彼らが僕らを認めなければ、爵位を捨てる。君を連れてどこまでも逃げる」

手に持つリング越しに私を見つめる。「君と二人で遠くへ行つて、名も知らない街で土地を買いたい。家を買って、静かに暮らしたい。子ども達に囲まれ、僕は死ぬまで君といたい。死ぬまで君を愛し続けるよ」

いつかアンナに言った言葉に似ている気がして、私は目をしばたかせた。「ジャン、それって――」

「それにしても僕ってすごいと思わない？ 僕は今まで忠実な廷臣で、模範的な貴族だった。なのにこうして君をさらおうとしている。他の男になど絶対渡すものかと思っている。それが例え王弟でも」

声をあげて笑った。「僕を動かしているのは君だ。僕にそうしたいと思わせているのは君。自分の行動に震えがくるよ。痛快すぎて震えがくる。たとえ何が起きても、僕は何が何でも君を妻にしようと思っていた。ずっと思っていた」

ジャンはもう一口リングをかじり、噛みしめ、首を動かし飲み込んだ。そして私をじっと見る。あまりにも真剣な目つきで見る。

「ノエル、君に出会えて良かった。本当に良かった。僕は君と出会えていなければ、つまらない一生を送っていたと思う。君がいてくれて幸せだ。君がいれば、何も望むものはない」

私はジャンを見返し、背筋をピンと伸ばした。「私も、私も同じ気持ちよ。ジャン」

闇夜に蹄鉄ていつの音が響いた。

私には音ひとつひとつが愛おしくて、一生忘れないでおこうと耳をすませた。心地良い音だった。

彼がいれば、何が起ころうとも怖くない。何が起きても乗りこえていける。私は幸せを噛みしめ、手綱を強く握りしめた。

これから試練は待ち受けるだろう。辛い思いをするかもしれないけれどそれ以上にこれから待ち受ける未来が嬉しくて、ジャンの傍で迎える未来が待ち遠しくて、私の心は踊り続けた。

もう一度、空を見上げてみる。変わらず月は浮んでいる。

私は宮廷の姉を思った。異国の地にいるエドワードを思った。大好きな彼らの名を呟き、幸せを祈った。祈らずにはいられなかった。それから静かにジャンを見て、凜々しい横顔を見つめた。次第に私の胸はうるさく鳴って、声を大にして叫びたくなった。

「……ノエル、どうしたの？」

息を吸い込んだ。思いつきり吸い込んだ。空いっぱい聞こえますように。世界中に聞こえますように。

「ジャン、愛してます!!」

完

6 / 6 (後書き)

【ミズルトーMistletoe】……ヤドリギ。

花言葉「困難に打ち勝つ」「忍耐強い」「私にキスをください」

こんにちは！ nicoでございます。^^

空気も読まない長い作品に、最後までおつき合いくださり、とても幸せです。どうもありがとうございます。

さぞかし読み難い作品でしょう。読み難さ、自負しております。土下座します。すみません！！

初めて一つの連載を終わらせる事ができました。おめでとう、自分。祝いたい気持ちでいっぱいです。

いや、しかし『愛』という言葉を使い過ぎてくたくたになってしまいました。汗

恋愛ものを書く事の難しさを痛感している次第です。

花言葉が生まれたのは、中世ヨーロッパの騎士が、戦場へ赴く際、村に残す恋人に花を贈り、花のイメージに言葉を託したのが始まりといわれています。クリスマスの花言葉を探して、書き始めたのがこの作品です。

しかし、拙さあふれる力量不足な作品となってしまった気がします。もしよろしければ、私めに感想や、手厳しいアドバイスをくださると、嬉しく思います。どうぞよろしくおねがいします。

でわでわみなさま、 Happy Merry Christmas
s!!

素敵なクリスマスをお過ごしください。^^

それからそれから、よいお年を！

p . s .

べた恋で検索していただきますと、他作者さまの作品も読む事ができます。^^

素敵な物語、おすすめでございます！ ぜひにっ。

2008 . 12 . 23 n i c o

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7095f/>

Mistletoe

2010年10月8日12時00分発行